ティーチング・ポートフォリオ

菱田 信彦

（記入日： 2026 年 2 月 28 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

科目名	年次	期間	必・選	単位
MANGA と anime	2	後期	選必	2
国際コミュニケーション	1	集中	選択	2
基礎ゼミナール	1	前期	必修	2
ライティングⅡ	2	通年	必修	2
イギリス文化史(1)	1	前期	選必	2
イギリス文化史(2)	1	後期	選必	2
英語文学演習	2	後期	選必	2
リサーチ＆プレゼンテーション	3	前期	選必	2
卒業研究	4	通年	必修	6
イギリス・アメリカ文化研究Ⅲ(1)（大学院）	1	後期	選必	2
比較文化論特論(2)（大学院）	1	前期	選必	2
修士論文指導	1	通年	必修	6

※2025 年度に開講された科目のみ記載

※開講されなかったが「総合講座(3)」（目白）のコーディネーターも務めた

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、社会にはそれぞれの人の立場、背負っている文化的・歴史的背景によってさまざまな価値観やものの見方・考え方が存在することを学生が理解し、相手の立場や価値観に配慮した柔軟で効果的なコミュニケーションを取れるようになること、さらにその理解をふまえて実社会の問題を調査・分析し、自分の立場を明確にした上でその問題について提言を行えるようになることである。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「MANGA と anime」では、日本の漫画・アニメ作品を分析した海外研究者の論文やその和訳を講読させ、また日本の作品とその英訳版を比較させること

により、漫画・アニメを通して見えてくる日本と海外の文化や感覚の違いに注目させた。さらにそれらをふまえて学生に日本の漫画・アニメのセリフやオノマトペを英訳させた。

「英語文学演習」ではイギリス、カナダ、アメリカなど英語圏諸国のよく知られた児童文学作品を、それらが書かれた時代の文化的・社会的背景をふまえて読解することにより、作品がその時代のジェンダー、階級、民族などの問題をいかに反映しているかに目を向けた。「リサーチ＆プレゼンテーション」では、社会的問題について英語でリサーチとプレゼンテーションを行う際の基礎を身につけさせるとともに、問題に対する賛否や優劣の判断を明確に示そうとする英語圏の人々の価値観を意識させ、それをふまえた上で資料評価やコア・ストラクチャーの確立など段階を踏んで自分たちのプレゼンテーションを作成させ、完成した英語プレゼンテーションの発表および相互評価行った。

大学院の前期科目「比較文化論特論(2)」では、比較文化研究に関する英語文献を履修者の関心に合わせて講読した。後期の「イギリス・アメリカ文化研究Ⅲ(1)」では、履修者が修士論文のテーマとしていた 18 世紀末の社会思想家メアリ・ウルストンクラフトおよび 19 世紀の小説家ジョージ・エリオットに結びつける形でイギリスやヨーロッパの文化に関する英語論文を講読した。ウルストンクラフトが信奉した非国教徒プロテスタントの「人は誰しも心の中で神と一対一のアクセスを得ている」という観念が彼女のフェミニズム思想の根幹であったことを確認するとともに、エリオットが啓蒙時代以降のヨーロッパにおける「女性問題」と「ユダヤ人問題」の複雑な絡みあいをウルストンクラフト思想に結びつけて表現しようとしていたことを理解した。修士論文指導では以上のような知見をふまえてエリオットの晩年の作品『ダニエル・デロンダ』の分析にとり組んだ。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

大学での学修に欠かせないリサーチとプレゼンテーションの基礎を身につけ、また、さまざまな立場が存在することを意識しつつ自分の意見を発信することができるようにするという点では、ある程度の成果を挙げたと考えている。とくに「リサーチ＆プレゼンテーション」で学生が作成し、提出した参考文献一覧、プレゼンテーションのアウトライン、原稿などには、彼女らが関心がある社会問題について理解を深め、多角的な視点から問題を分析し、エビデンスを

集めて自分たちのメッセージを効果的に発信しようと苦闘したプロセスを見てとることができる。[エビデンス 1]。また「MANGA と anime」で学生が提出した課題には、言語の違いがものの見方や考え方に決定的な違いをもたらすことに対する学生の理解が示されている［エビデンス 2]。

その一方、「イギリス文化史(1)(2)」や「英語文学演習」では教員の講義が中心になり、学生の意見を引き出し、ディスカッションを行うことが十分にできなかった。Forms を通して毎回コメントシートを提出させ、教員がそれにフィードバックすることでできるだけ補ったが、さらにやり方を工夫しなければならないと考えている。

院生に修士論文を無事提出させられたことは大きな成果であり、それについては心から安堵している。

５　今後の目標（これからどうするか）

学生の問題意識と主体性をより高める活動が必要になる。「リサーチ＆プレゼンテーション」のようなアクティブな学びを中心とする科目では、教員の働きかけは環境づくりにとどめ、テーマの設定やグループワークの進行を学生自身で運営するような形が望ましい。また教材についても、これまではプリントやパワーポイント資料の形で授業中に提示していたが、クラウドに保存するなどして学生が授業時間外に自由に閲覧できるようにし、より多くの授業時間を学生の主体的な活動にあてられるようにしたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1「リサーチ＆プレゼンテーション」の参考文献一覧、プレゼンテーションのアウトライン、原稿など（非公開）

2「MANA と anime」提出された課題（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

【2025（令和 7）年度前期】

観光文化学科　氏名：櫻井　正

（記入日：2025 年 8 月 4 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

◇観光文化（日本）選択必修
◇観光文化専門演習（1）必修
◇観光マーケティング
◇キャリア・プランニングⅣ（1）目白キャンパス、我孫子キャンパス
◇旅行業務取扱管理者講座（1）

◇観光文化（日本）選択必修

２　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan

(1) 日本各地の様々な伝統文化および自然を利用した観光の歴史や特徴を理解している。
(2) 文化を活用した持続可能な観光振興の在り方を考察する能力を有している。
(3) 日本の伝統的文化の保存とその問題点について論じることができる。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do

本科目の教育目標（到達目標）を踏まえ、観光文化論の理論を土台として、日本各地の文化を軸とした観光振興の特徴とその課題を、事例紹介を交え（input）ながら学び、プレゼンテーション(output)の両輪で授業を構成する。プレゼンテーションは AISAS の法則（購買行動モデル）に則って、自然景観・都市・温泉・観光地（施設）・食の中から２つ以上選びおこなう。

４　成果（どうだったか：結果と評価）Check

プレゼンテーション（発表）内容、授業中のリアクションレポート、期末試験により学修成果をはかった。プレゼンテーションについては、回を重ねる毎に精度があがっていった。これは他者評価をリアクションレポートでおこなうことに起因していると考える。

５　今後の目標（これからどうするか）Action

次年度の課題としては、JTB 総合研究所発行の教科書が廃刊となるため、新しい教科書選定が必要となる。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・リアクションレポート（非公開）
・授業 Power Point 資料（非公開）

◇観光文化専門演習（1）必修

２　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan

(1) 理論研究（第 4～10 回）では知識を習得し、論じることができる。
(2) 応用研究（第 11～14 回）では事業計画に則った企画を遂行するために「プロジェクトコンセプトシート」を作成できる
(3) 夏合宿（フィールドワーク）において、他者と協働した行動を主体的に行うことができる

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do
　櫻井ゼミナールのテーマである「観光経営人材育成プログラム開発」は各業種における職務遂行能力を理論と実践から獲得し、職業的レリバンス（観光教育とその先の企業との接続）を図っていく。『観光文化専門演習(1)・(2)』においては「リゾート型民泊ビジネス（バケーションレンタル)」・「日帰りバスツアービジネス」を題材として、社会に還元できる研究テーマの設定を各自がおこない、企画・実践した社会実装活動を評価していく。

４　成果（どうだったか：結果と評価）Check
　株式会社ミドルウッドが経営する「伊豆熱川温泉ホテルカターラ RESORT＆SPA」の課題解決型授業（閑散期の宿泊プランをゼミ生が考案）をおこなった。

【企画発表までのスケジュール】
　4/２４　ミドルウッドと ZOOM 会議
　　以降、ゼミ内にて企画会議
　6/１２　ミドルウッドへプレゼンテーション（ZOOM にて）
　　「女子大生が考える“ゼンキュウ”でお得に楽しむ連泊プラン」
　　～海を一望 BBQ！カラオケ・卓球・岩盤浴～
　8/3 現在、じゃらん・楽天に発表すべくリスティング作成中

５　今後の目標（これからどうするか）Action
　理論研究に触れる機会が少なかったのが次年度への課題であると考える。このあたりは後期科目である観光文化専門演習（2）でフォローしていく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
　・川村学園女子大学 HP「学科 NEWS 記事一覧」（公開）
　・企画プレゼンテーション PPT（非公開）

<u>◇観光マーケティング</u>
２　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan
(1)マーケティングの基礎理論を理解できる。
(2)マーケティング理論が観光産業において実際にどのように応用されているのか理解できる。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do
　観光に関わる事業において、観光者の真に求める観光行動とニーズの実現をどのように目指し、同時に事業目的および地域利益を達成するのか、その過程を学ぶ。マーケティングの基礎理論を学修したうえで、それが観光ビジネスの現場において実際にどのように展開されているのか、星野リゾートが運営するホテル・旅館をケース・スタディとして取り上げていく。具体的には講義の冒頭とクロージングで解説をおこない（input)、授業内においては動画やレジュメを読み込み、リアクションレポートを作成する（output）

４　成果（どうだったか：結果と評価）Check
　授業内でのリアクションレポート、期末試験で学修成果をはかった。
　期末試験は、観光マーケティングの知識を活かして、課題を解く応用問題の出題形式をとり入れた。
　授業評価アンケートにおいては「総合的に判断し、この授業に満足できましたか」の設問に対し、「そう思う」の回答が 100％であった。

５　今後の目標（これからどうするか）Action
　授業評価アンケートにおいて「この授業を受講するにあたりどの程度事前学習と事後学修を１週間に平均何時間程度おこないましたか」との設問に「ほとんどしない」が 40%（前年 43%）であった。数字は良化したものの、引き続き次年度の課題としていきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
・作成したレジュメ（非公開）
・授業 Power Point 資料（非公開）

◇キャリア・プランニングⅣ（1）目白・我孫子

２　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan
(1)インターンシップにエントリーするための、エントリーシートの作成ができる
(2)就職活動に必要な知識や技術、手順を理解することができる

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do
　担当教員、目白事務室、就職支援室、マイナビ等就職関連業務に従事している外部講師とが一体となった授業運営をおこなう。就職活動の必須条件となりつつあるインターンシップへの参加を目指す。

４　成果（どうだったか：結果と評価）Check
　エントリシートの作成、リアクションレポート、インターンシップ計画書、グループディスカッションへの貢献・参加度で学修成果をはかった。エントリーシートは 2 回の作成と添削を学部学科教員が一体となりおこなった。アセスメントとして適性能力検査や PROG を活用した自己 PR を試みた。
　授業評価アンケートにおいては「総合的に判断し、この授業に満足できましたか」の設問に対し、「そう思う」「どちらかというとそう思う」の回答を合わせて 87%（前年 96%）であった。

５　今後の目標（これからどうするか）Action
　「まとめシート」において、「就職に向けてのスケジュールなどの計画の見通しがついた」「自己 PR の構成の組み方を学べとても助かり、書き出しについての悩みが減った」などというコメントの通り、授業回数を重ねるごとに学生の本科目に対する積極的な態度が増すことを感じた。
　授業 15 コマで１セット（インターンシップ対策）となる制度設計であるが、途中欠席者も散見する。このあたりを工夫していきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
・PROG の結果（非公開）
・適性能力検査模擬試験（非公開）
・インターンシップ計画書（非公開）
・まとめシート（非公開）

◇旅行業務取扱管理者講座（1）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan
国内旅行業務取扱管理者試験（国家資格）の合格を目指す。
(1)旅行業法を理解し説明できる
(2)標準旅行業約款を理解し説明できる

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do

国家資格対策本に則り、解説・輪読・過去問対策をおこなう。また解説は実務家教員として、事例を都度紹介し、印象に残る解説につとめる。

４　成果（どうだったか：結果と評価）Check

学習成果を期末試験に過去問を中心とした出題で図った。前期では試験科目のうち、業法・約款のみとなるため、9 月実施の国家試験本番では、受験者自身の自力学習が相当問われるため、専門学校トラベル＆コンダクターカレッジと協働して対応していく。

（履修者２名。内、受験者 2 名）

５　今後の目標（これからどうするか）Action

アフターフォローは資格の専門学校に依頼。1～2 名の合格を目指す。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・特になし

ティーチング・ポートフォリオ

【2025（令和 7）年度後期】

観光文化学科　櫻井　正

（記入日：2026 年 2 月 4 日）

1　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

◇観光文化入門演習　必修
◇観光文化専門演習（2）必修
◇キャリア・プランニングⅣ（2）我孫子・目白
◇外食産業論

<u>◇観光文化入門演習　必修</u>

2　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan

(1) 旅行商品造成の How-to を理解し、応用できる。
(2)バケーションレンタル（民泊）の商品特性を理解し、興味を持った項目についてプレゼンすることができる。
(3)「カワジョ時間」（自身の大学生活）をセルフプロデュースすることができる。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do

本科目の教育目標（到達目標）に準じて授業をおこなうが、履修生（ゼミ生）が 2 名であるため本人の理解度にあわせて展開していった。櫻井ゼミナールのテーマである「観光経営人材育成プログラム開発」の入門編である。『専門演習(1)(2)』が応用編となる。そして社会に還元できる研究テーマの設定をしていく『卒業研究』で完結する。担当教員の旅行会社企画部門における売れる商品造成の経験知、バケーションレンタル（民泊）の経営を通じて培った諸理論に基づき、文献購読を中心に学修し、受講生が観光関連産業に興味・関心が持てることを目的とする。

4　成果（どうだったか：結果と評価）Check

授業中のリアクションレポート、「リゾート型民泊ビジネス」論文購読、ジョブカード様式 1－2「キャリアプランシート」、那須高原 ve_nasu オーベルジーヌ館リノベーションプランのプレゼンテーションにより学修成果をはかった。また住宅宿泊事業法にも触れ、事業特性を法的根拠から確認した。議論も活発におこなわれ、適度な距離感で意思疎通が図れていると感じている。

5　今後の目標（これからどうするか）Action

ゼミ募集の段階から、到達目標を明確に開示して募集をおこなっていきたい。また現役ゼミ生をゼミ募集時のプレゼンテーションに加えることにより、入ゼミ要件を工夫していきたい。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・授業内リアクションレポート（非公開）
・那須高原 ve_nasu オーベルジーヌ館リノベーションプランプレゼンテーション資料（非公開）

<u>◇観光文化専門演習（2）必修</u>

2　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan

(1)理論研究（第 2～6 回）では知識を習得し、論じることができる。
(2)応用研究（第 7～10 回）では事業計画に則った企画を遂行するためにプレゼンテーションをすることができる。

(3)卒業論文作成に向けての知識を理解できる。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do
櫻井ゼミナールのテーマである「観光経営人材育成プログラム開発」は各業種における職務遂行能力を理論と実践から獲得し、職業的レリバンス（観光教育とその先の企業との接続）を図っていく。『観光文化専門演習(1)・(2)』においては「リゾート型民泊ビジネス（バケーションレンタル)」・「日帰りバスツアービジネス」を題材として、社会に還元できる研究テーマの設定を各自がおこない、企画・実践した社会実装活動を評価していく。

4　成果（どうだったか：結果と評価）Check
「ゼミナール報告書」と「卒業論文」の２点を中心に評価をおこなった。双方において卒論の型である、表紙・はじめに・研究方法・自身の研究する概要の記述をしてもらった。やや稚拙な内容ではあるが、論文としての型は一定の理解を得たと考える。

5　今後の目標（これからどうするか）Action
今年度に引き続き「ゼミナール報告書」と「卒業論文」を中心に評価をしていく。また、そこに至る過程に工夫をしていきたい。(夏合宿の実施など)

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
・「ゼミナール報告書」（公開）
・卒業論文（非公開）

◇キャリア・プランニングⅣ（2）我孫子・目白

2　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan
就業に向けた対策を実践的に学び、自身が志望する卒業後の進路を実現するスキルを身に着けることを目標としている。

3　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do
担当教員による３回の履歴書の添削指導、就職支援室、マイナビ等就職関連業務に従事している外部講師とが一体となった授業運営をおこなう。業界・企業研究をはじめ、エントリーシート・面接対策など実際の就職活動を想定した実践的な授業をおこなった。

4　成果（どうだったか：結果と評価）Check
大学指定履歴書の作成、模擬面接への貢献・参加度で学修成果をはかった。履歴書の添削・指導を学部学科教員が一体となりおこなった。アセスメントとして大学指定履歴書を活用した。担当する教員による３度に及ぶ「大学指定履歴書」添削指導・支援を通じて履修者の履歴書の精度がアップしていると感じた。またアンケート結果から学生自身が成長を感じていることが読み取れた。特に今年度はいわゆる「志望動機」欄に力を入れて取組んだ。

5　今後の目標（これからどうするか）Action
授業評価アンケートによると「６授業に対する教員の熱意は感じられましたか」「そう思う」「どちらかというとそう思う」100%「１３総合的に判断してこの授業に満足できましたか」「そう思う」「どちらかというとそう思う」88%など、一定の成果を得られたと考える。しかしながら授業への欠席者が多い点、学内企業解説会への参加が極端に少ない点を鑑みると、外部環境(超売り手市場、スカウトによる内定決定者、生成 AI による応募書類作成など）に応じた指導・支援の改革が必要と感じる。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
・大学指定履歴書（公開）

・適性能力検査模擬試験（非公開）

◇外食産業論

２　理念（なぜやっているか：教育目標）Plan

⑴外食産業の事業特性を事業者ごとのミッションステートメント、経営戦略（全社戦略・事業戦略・機能別戦略）から理解することができる

⑵訪日外国人（インバウンド）の来訪目的の１つである日本食について、洞察することができる

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）Do

外食産業の歴史的変遷と現代の業態を学ぶことでホスピタリティ産業の１つである外食産業の構造や特性について理解する。

具体的には外食産業の歴史的変遷は教科書から学び、現代における業態については毎時間おこなう受講者のプレゼンテーションをベースにグループワーク、その後解説を加えた。

４　成果（どうだったか：結果と評価）Check

業態別のプレゼンテーション、リアクションレポート、期末試験で学修成果をはかった。

教科書からの学びとしては、産業としての外食について、江戸時代に原点があることや、大阪万博を通じて産業化が図られたことなどの学びを得たようである。

授業評価アンケートからは「６授業に対する教員の熱意は感じられましたか」「そう思う」「どちらかというとそう思う」100％「１３総合的に判断してこの授業に満足できましたか」「そう思う」「どちらかというとそう思う」100％など、一定の成果を得られたと考える。

期末試験は、外食産業を取り巻く環境・課題に関する資料を読み、要約し、それに対して自身の考えを書く課題を課した。また、本講義からの学びを自分の人生にどういかせるかという問いに対して「飲食店を選ぶ際の参考になると思う。就職先の１つとして検討したいと思う。というコメントが印象に残っている。

５　今後の目標（これからどうするか）Action

既に記載の通り外食は受講者にとって利用することは元よりアルバイト等を通じて身近である。ゆえに外食産業論として学ぶことに気づきが多いようである。

アンケート項目の「12.授業内容に触発され、もっと勉強したいという気持ちになりましたか？」について 86％の履修者が関心をもってもらえた。また「13. 総合的に判断して、この授業に満足できましたか？」については 100％の履修者が満足できたとの回答を頂きまして、シラバス記載の本授業の到達目標の１つを達成できたと自負している。

次年度への改善点としてましては外部講師を招聘し産学連携のインターンシップメニューの開発を模索していきたいと考える。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

・授業 Power Point 資料（非公開）
・リアクションリポート（非公開）
・授業評価アンケート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化　氏名：高山啓子

（記入日：2025 年　　9 月　22 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

基礎ゼミナール（必修 2 単位）、プレゼミナール 2 クラス（必修 2 単位）、観光概論（必修 2 単位）、景観論（選択必修 2 単位）、観光社会学（選択必修 2 単位）、観光文化実践 II（選択必修 2 単位）、フィールドワーク法（選択必修 2 単位）、観光まちづくり論（選択必修 2 単位）、観光文化入門演習（必修 2 単位）、観光文化専門演習(1)(2)（必修各 2 単位）、現代の社会 2 クラス（選択必修 2 単位）、社会学概論（選択必修 2 単位）、総合講座(2)コーディネーター（選択必修 2 単位）ジェンダー社会論基礎論(1)（大学院選択必修 2 単位）、メディア研究 I(1)（大学院選択必修 2 単位）、メディア研究 II(1)（大学院選択必修 2 単位）、メディア研究 III(1)（大学院選択必修 2 単位）、女性学専門研究演習（大学院）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

観光を含む社会のさまざまな現象に対して学生自身が関心を持ち、それぞれの問いを立て、調査・分析できるような機会をつくること、またそれらを協同して行えるようになることを目指している。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

※前期担当科目のみ（一部を具体的に）記載

(1)講義形式の授業

学生がその回のテーマに関する課題（シラバス事前学修で提示したもの他）について自分の考えをまとめたものを授業の最後に提出してもらうという方法をとっている。また授業内で複数の問いについて考えを述べてもらっている。Teams を活用して事前に資料をアップし、授業内では投稿機能やアンケート機能を使用して考えなどを書き込んでもらい、自分の意見をまとめるだけでなく他の学生の考え方や発想を知ることで視野を広げてもらう工夫をしている。

○観光概論：1 年次必修の「観光概論」ではテキストに基づき観光に関する基本的な知識を身につけてもらうこと、また観光に関するさまざまな現代の課題について自分の意見を持てることを目的としている。テキストのポイントをわかりやすくまとめ、グラフや写真、関連する記事やウェブサイトを提示し、より深く多角的に理解できるようにしている。また毎回の授業内でのコメント提出以外に、中間テストを実施しそれについて解説を行うことで、各自でその段階での理解度を把握できるようにしている。

○観光社会学：観光現象の具体的事例をその都度紹介することで、歴史的経緯、現在の状況や課題をより関心を持って理解できるよう工夫している。スライドに要点をまとめ、写真、グラフ、関連するウェブサイトを示しながら理解を促している。事例を用いたレポートを課題として提出してもらった。

○景観論：「景観」という概念と歴史的変遷、現代の政策や地域振興との関連性を学ぶために、景観整備前、整備後の比較写真等を用いて具体的事例を紹介することで、より関心を持って理解できるよう工夫している。レポートは具体的事例をあげて論じてもらった。

(2)アクティブラーニングを取り入れた授業

基本的に講義形式と同様ではあるが、それに加え授業内で実践的な作業や意見交換を取り入れ、学生が主体的に取り組む工夫をしている。

○観光文化実践 II：「景観・観光まちづくり」をテーマに「豊島区景観形成特別地区」を対象とし、事前に豊島区景観計画を学び、4 地区（神田川沿川、雑司ヶ谷、池袋東口、池袋西口）についてフィールドワークを実施した。一度のフィールドワークにつきグループ単位で該当地区の事前研究報告を行ってもらい、それに基づき現地での観察調査を実施し、事後調査報告を行ってもらった。最終的に個人で各地区の景観まちづくりと観光まちづくりのレポート作成、観光ガイドマップの作成を行ってもらった。

○現代の社会：テキストを元に各回、内容を説明したうえで、現代の社会の複雑な諸問題について「自分はどう考えるか、何を選択するか」という自分の問題として深く考えて記述してもらい、その考えを理由を含めて説明してもらっている。また事前、事後に学生同士が意見交換をすることにより、想像力や広い視野を持てるような工夫をしている。

(3)演習授業

演習形式で研究発表をしながら研究方法を身につけ、各自の研究テーマを掘り下げていってもらっている。

○基礎ゼミナール（1 年次）：文献の検索と利用、新聞記事の利用、レジュメと発表スライドの作成、グループワーク、発表、ディスカッション、レポート作成の方法が身につくよう実践してもらっている。グループワークおよび個人研究では特定の地域をそれぞれが選んで研究対象とし、ガイドブック、公的なウェブサイト（観光協会など）、新聞記事、統計データを用いて、プレゼンテーションをおこなってもらった。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

各科目において、学生の自主的な関心を高め、自分の考えを持たせ、それを発表し、他人の意見を聞いて自分の考えの幅を広げさせることができた。学生

によってばらつきはあるが人数の多い授業では投稿機能やアンケート機能も使用して意見を述べてもらい、相互にさまざまな意見を聞き、知識や考え方の幅を広げることができた。

観光社会学および景観論では、観光の具体的な事例を知ることでより観光についての関心を高め、その中から課題を発見し、自分の考えや意見を持つことができていた。また実践的応用への関心も高まっていた。

観光文化実践 II では学生がフィールドの対象地域に積極的に関心を持ち、フィールドでの観察調査をすることでより詳細で高度な知見を手に入れることができていた。またその結果を観光ガイドマップの作成という形で応用することもできていた。

基礎ゼミナールでは基本的な文献検索やレジュメ、レポートの作成、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションを行うことができ、大学での研究の基本的な方法を身につけることができていた。また観光について学ぶうえでの基礎的な知識も身につけることができていた。

現代の社会では、社会のさまざまな問題を自らのこととして考えるということができていた。

５　今後の目標（これからどうするか）

自主的な取り組みに対して消極的な学生にそれを促す方法、また学生が積極的にディスカッションに参加する方法が課題であるため、より工夫をしていきたい。学生各自がさまざまな現象に関心を持ち、専門的知識を用いて理解、分析できるようになることを目指したい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

授業で提出された課題、レポート（非公開）、授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化　氏名：高山啓子

（記入日：2026 年　　2 月　27 日）
１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）
後期担当科目
プレゼミナール 2 クラス（必修 2 単位）、フィールドワーク法（選択必修 2 単位）、観光まちづくり論（選択必修 2 単位）、観光文化入門演習（必修 2 単位）、観光文化専門演習(2)（必修 2 単位）、現代の社会（選択必修 2 単位）、総合講座(2)コーディネーター（選択必修 2 単位）
ジェンダー社会論基礎論(1)（大学院選択必修 2 単位）、メディア研究 I(1)（大学院選択必修 2 単位）、メディア研究 II(1)（大学院選択必修 2 単位）、メディア研究 III(1)（大学院選択必修 2 単位）、女性学専門研究演習 I（大学院）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）
　観光を含む社会のさまざまな現象に対して学生自身が関心を持ち、それぞれの問いを立て、調査・分析できるような機会をつくること、またそれらを協同して行えるようになることを目指している。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）
※後期担当科目のみ（一部を具体的に）記載

(1)アクティブラーニングを取り入れた授業
　学生がその回のテーマに関する課題（シラバス事前学修で提示したもの他）について自分の考えをまとめたものを授業の最後に提出してもらうという方法をとっている。Teams を活用して事前に資料をアップし、授業内では投稿機能やアンケート機能を使用して考えなどを書き込んでもらい、自分の意見をまとめるだけでなく他の学生の考え方や発想を知ることで視野を広げてもらう工夫をしている。また授業内で複数の問いについて考えを述べてもらっている。
　授業内で実践的な作業や意見交換を取り入れ、学生が主体的に取り組む工夫をしている。

o フィールドワーク法：フィールドワークという調査方法を学び、身に付けることを目的としているため、方法の説明やフィールドワークの研究事例を紹介しながら、学生各自が調査テーマ、フィールドワークの具体的な方法と調査項目の設定をおこない、最終的にフィールドワークを実施し、報告をしてもらった。第 13 回の授業で課題解決型のフィールドワーク事例を紹介し、第 14 回の授業でフィールドワークの事前準備（各自の関心に沿ってフィールドと調査方法：インタビューまたは観察　を決定、仮説と調査項目の設定およびフィールドの概要を調べてまとめる）をおこなったうえで、各自が実際に課題解決型の

フィールドワークを実施する課題を実践してもらった。その調査結果をまとめ、第 15 回の授業においてフィールドワーク調査の結果報告をプレゼンテーション発表してもらった。

o観光まちづくり論：観光まちづくりを理解し、実際に行われているさまざまなまちづくりの方法を学び、最終的に観光まちづくりの企画立案を行ってもらった。まず、観光まちづくりの背景や具体的な方法を理解してもらうために、観光まちづくりの取り組み事例を多く紹介し、まちづくりの実際のイメージを持ってもらった。また各自で観光まちづくりの企画を行うために、各自で地域を設定した上で、毎回の授業でまちづくりに必要な項目（まちづくりが必要とされる背景と課題、地域資源、目標、住民や事業者や行政がそれぞれ携わること、など）を調べる課題を出した。その各項目をまとめる形で、観光まちづくり企画案を作成し、第 15 回の授業で発表してもらった。

o現代の社会：テキストを元に各回、内容を説明したうえで、現代の社会の複雑な諸問題について「自分はどう考えるか、何を選択するか」という自分の問題として深く考えて記述してもらい、その考えを理由を含めて説明してもらっている。また事前、事後に学生同士が意見交換をすることにより、想像力や広い視野を持てるような工夫をしている。

(2)演習授業

演習形式で研究発表をしながら研究方法を身につけ、各自の研究テーマを掘り下げていってもらっている。

oプレゼミナール（1 年次）：前期の基礎ゼミナールで学んだことを踏まえ、文献（専門の論文）の検索と利用、新聞記事の利用、レジュメと発表スライドの作成、グループワーク、発表、ディスカッション、レポート作成の方法が身につくよう実践してもらっている。グループワークでは観光庁による報告書を用い、課題の解決案を提示するプレゼンテーションをおこなってもらった。また個人研究では専門の論文を用いて考察をしたうえで、統計データや事例を提示して実証するという方法を実践してもらい、最終的にはレポートとしてまとめ、発表、提出してもらった。

o観光文化入門演習：テキストを観光の理論、事例、地域についての章を各自の関心に従ってそれぞれ分担してもらい、研究・発表・ディスカッションをおこなってもらった。司会進行も持ち回りで学生自身がおこない、積極的にディスカッションに参加し、活発化させる工夫を考えてもらった。テキストの内容を理解するだけでなく、該当する事例を考察することで実証する思考を養うよう工夫をおこなった。

o観光文化専門演習(2)：前期のテキストでの学びを踏まえ、各自の研究テーマを設定し、専門の論文を中心とした参考文献を用いて、研究・発表・ディスカ

ッションをおこなってもらっている。最終的に「ゼミ論文」を作成し、4 年次での卒業研究につながる研究をおこなってもらった。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

各科目において、学生の自主的な関心を高め、自分の考えを持たせ、それを発表し、他人の意見を聞いて自分の考えの幅を広げさせることができた。学生によってばらつきはあるが人数の多い授業では投稿機能やアンケート機能も使用して意見を述べてもらい、相互にさまざまな意見を聞き、知識や考え方の幅を広げることができた。

○フィールドワーク法：フィールドワークの基本的な考え方、方法について理解することができていた。また具体的な調査事例を知ることでより観光に関わるフィールドについての関心を高め、その中から課題を発見し、自分の考えや意見を持つことができていた。

○観光まちづくり論：多くの事例を通して毎回考察をおこなことにより、観光まちづくりのさまざまな側面について深く理解することができていた。観光まちづくり企画をおこなうために、毎回一項目ずつの課題を調べて考えることにより、多角的に観光まちづくりの企画の準備をすることができていた。最終的にその課題をまとめてさらに詳細な観光まちづくり企画を作成し、それぞれがプレゼンテーションをすることができていた。

○現代の社会：テキストを十分理解し、他の学生との意見交換、ディスカッションをおこなうことにより、社会のさまざまな問題を自らのこととして考えるということができていた。

○プレゼミナール：基本的な文献検索やレジュメ、レポートの作成、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションを行うことができ、大学での研究の基本的な方法を身につけることができていた。

○観光文化入門演習：テキスト発表をすることにより内容の理解とディスカッションによってよりその理解を深めることができていた。学生自身が司会進行をおこなうことにより、その場を責任を持って運営することと、積極的に意見の発表を促す工夫をすることができていた。最終的に、各自が自分の関心のある研究テーマを考えることができていた。

○観光文化専門演習(2)：各自のテーマを明確化し、研究テーマに適した参考文献を用いて研究をまとめることができていた。

５　今後の目標（これからどうするか）

自主的な取り組みに対して消極的な学生にそれを促す方法、また学生が積極的にディスカッションに参加する方法が課題であるため、より工夫をしていき

たい。学生各自がさまざまな現象に関心を持ち、専門的知識を用いて理解、分析できるようになることを目指したい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）
　授業で提出された課題、レポート（非公開）、授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

観光文化　学科　　氏名　山下琢巳

（記入日：2025 年　　８月　４ 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

世界遺産(2)、観光文化専門演習(1)、地誌学(1)、地理学概説(1)、地理学概説(2)、日本地誌、観光文化実践Ⅴ、観光文化実践Ⅵ

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

世界遺産(2)

各国の世界遺産がもつ歴史文化的な特徴を把握し、現在まで残されてきた意義を考えられるようになること、文化財の保護に関しての課題をその国の特質に即して考察できるようになること。

観光文化専門演習(1)

地図から地域の特徴を読み取る「読図」の手法を習得し、取り上げる地域の特徴を多面的に分析し、他者にわかりやすく説明できるようになること。具体例として、第１次産業と観光、観光マップ・イラストの役割、音楽・芸術イベントと地域の３つについて、産業の構造や地域の特徴を地図の上で表現し、分析、考察、発表と討議ができるようになること。

地誌学(1)

地理学における地誌の考え方を理解すること。自然環境と歴史背景をを踏まえて、取り上げる地域ごとの共通点や相違点を認識し、他者にわかりやすく説明できるようになること。地域区分の事例として、日本国内のスケール、日本と外国のスケールが理解できるようになること。

地理学概説(1)

自然環境と人のかかわりについて、地形が及ぼす影響と、それらが歴史的にも大きく変化しながら現在に至ることを理解できるようになること。

地理学概説(2)

自然環境と人のかかわりについて、地形が及ぼす影響を適切に理解できるようになること。

観光文化実践Ⅵ

江戸時代に、江戸の街を紹介した旅行ガイドともいえる「江戸名所図会」を資料として、当時どのような場所が名所とされ人気があったのか、そしてそれが交通の発達による日帰り圏の拡大、観光地の多様化によってどのように変化していったのかを探る。その結果、観光地変遷の過程であまり顧みられなくなった地点について、今日的な地域資源として活用する方法を提案すること。

日本地誌

日本国内で展開される産業や経済活動と、その集合体である人々の生活について、自然環境と社会経済活動の歴史的背景の関連を理解できるようになること。

観光文化実践Ⅴ

日本を代表する観光資源である温泉に注目し、その起源や分布について基礎的な知識を習得すること。「温泉」そのものと、「温泉地」の違いや特徴、役割を理解すること。温泉が人々に果たしてきた役割の変遷を理解すること。上記3 点を踏まえて、温泉の現状や今後の展望を考察する基礎を身に着けること。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

・講義形式の授業

地誌学(1)、地理学概説(1)、地理学概説(2)、日本地誌

授業２～4 回で１つのテーマが終わるように設定し、全 15 回で合計 4～5 のテーマを取り上げた。そして、各テーマが相互に関連し、比較できるようになっていることを説明し、複数の具体例を掘り下げることで事象の普遍性や特異性を客観的にとらえる機会を提供した。

・資格取得を目指す授業

世界遺産(2)

世界遺産検定の公認テキストを用いて、ユネスコの理念、組織、目的と、世界遺産の具体例を解説した。そして実際の検定問題を公式問題集から複数出題し、その傾向を踏まえた解説を行った。

・アクティブラーニングを取り入れた授業

観光文化専門演習(1)

観光地を視覚的にわかりやすく訪問者に説明するイラストマップの作成が流行している。それらの作成意図や効果について、各自が持ち寄った具体例からディスカッションを行った。

・フィールドワークを取り入れた授業

観光文化実践Ⅵ

実際に現地に赴き、目白台地と周辺の谷地が作る地形の高低差と寺社の配置・繁華街の立地を体感することができた。

4　成果（どうだったか：結果と評価）

・講義形式の授業

回を進めるごとに授業で取り上げた事例の数が増加し、しかもそれぞれが関連していることが理解できるようになった。

・アクティブラーニングを取り入れた授業

授業で取り上げた３つのテーマを参考にしながら、各自卒業論文のテーマを設定することになった。

・フィールドワークを取り入れた授業

観桜文化実践Ⅵでは、雑司が谷鬼子母神堂など現地に赴き、伝統的な参詣土産・玩具である「ススキミミズク」の現状から、今日的なグッズ展開の案を考えるなど、地域資源の活用方法を考えることができた。

5　今後の目標（これからどうするか）

講義科目に関しては、具体例となる画像・映像資料をさらに充実させ、学生の理解度向上に努めたい。

世界遺産(2)に関しては、今年度の様に世界遺産検定の受験学生がいない場合を想定し、検定用のテキストのみに沿った授業展開だけでなく、臨機応変に行うことをシラバスに明記するなどしたい。

ゼミ形式の授業では、発表資料の作成に関して、地図を利用する方法を

授業内で一人ずつフォローアップしながら行っていきたい。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

各授業の PowerPoint、Word 資料（非公開）

各授業の授業終了時復習用小テスト（非公開）

演習・実践授業の学生発表資料（非公開）

2025 年度後期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

観光文化　学科　　氏名　山下琢巳

（記入日：2026 年　　2 月　19 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

観光文化入門演習、観光文化専門演習、地誌学(2)、観光地理学、世界遺産（1)、世界地誌

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

観光文化入門演習

ある場所を訪れる価値というのは、時代によって、あるいは地域や国によって変化するが、それらを

・人や社会の価値観の変化と観光地の関係

・それらを踏まえた観光モデルコースの作成

・地域資源への注目のしかたと実践

という 3 つの視点から取り上げ、観光に対する主体的なかかわり方の基礎を分析・考察するための基礎的な知識を習得すること。

観光文化専門演習（２）

地図から地域の特徴を読み取る「読図」の手法を習得し、取り上げる地域の特徴を多面的に分析し、他者にわかりやすく説明できるようになること。具体例として、自分でデータ収集を行い、必要な範囲の地図上に主題図が作れるようになること。そして、分析、考察、発表と討議ができるようになること。

地誌学（２）

日本国内で展開される産業・経済活動と、その集合体である人々の生活について、自然環境と価値観の変化という歴史的背景の関連を理解できるようになること。

観光地理学

取り上げるそれぞれの事象について、時代ごとの社会・経済の影響が重層的に存在し、それらが観光資源や観光行動につながっていることが理解できるようになること。

地理学概説（２）

自然環境と人のかかわりについて、地形が及ぼす影響を適切に理解できるようになること。

世界遺産（１）

世界遺産に関する基本的な知識を学びつつ、希望者は世界遺産検定 3 級もしくは 4 級の取得をめざす。

世界地誌

自然地理と人文地理という２つの地理学的な視点を用いて、世界各地の人々の暮らしや特徴を明らかにし、それらが観光地とどう結びついているのか、各地域が抱える課題を含めて明らかにする。また、希望者は旅行地理検定 3 級もしくは 4 級の取得を目指す。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

・講義形式の授業

地誌学（２）、地理学概説（２）、観光地理学、世界地誌

授業２～4 回で１つのテーマが終わるように設定し、全 15 回で合計 4～5 のテーマを取り上げた。そして、各テーマが相互に関連し、比較できるようになっていることを説明し、複数の具体例を掘り下げることで事象の普遍性や特異性を客観的にとらえる機会を提供した。

・資格取得を目指す授業

世界遺産（１）

毎回講義の後半に、検定の問題集を用いて具体的な出題傾向と解答を解説した。

・アクティブラーニングを取り入れた授業

観光文化入門演習

各自の設定したテーマに合わせて訪れる観光地を複数選び、その場所の観光プロモーションを行うことを発表に取り入れた。

4　成果（どうだったか：結果と評価）

・講義形式の授業

回を進めるごとに、「過去の授業で取り上げた事例」を、比較対象として使うことができるため、それぞれの相違点と共通点を客観的に考察することができた。

・資格取得を目指す授業

世界遺産（1）

資格向けに講義を行うとシラバスで明記しているにもかかわらず、履修者のうち実際に世界遺産検定を受験した学生がいなかった。今後もこの傾向が続くと思われるので、過去問に頼らず世界遺産の魅力を伝える授業にシフトしていきたい。

・アクティブラーニングを取り入れた授業

観光文化入門演習

発表する学生が、自身ともう1人のキャラクターを設定し2人の会話形式でプレゼンを進めるなど、おそらく趣味の動画視聴などで得たアイデアを授業に活用して好評を博する例もあった。

5　今後の目標（これからどうするか）

講義科目に関しては、具体例となる画像・映像資料をさらに充実させ、学生の理解度向上に努めたい。

「世界遺産（1）」

受験者の増加に向けてガイダンスで丁寧な説明を行うこととするが、限界もある。それゆえ教養としての世界遺産の意味付けも重視していく。とくに地理学の教員である強みを生かし、自然遺産のしくみをわかりやすく解説していく。

ゼミ形式の授業では、発表資料の作成に関して、地図を利用する方法を授業内で一人ずつフォローアップしながら行っていきたい。

6　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

各授業の PowerPoint、Word 資料（非公開）

各授業の授業終了時復習用小テスト（非公開）

各授業の学生発表資料（非公開）

2025 年度後期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化学科　氏名：植松 大介

記 入 日：2025 年 9 月 16 日

更新対象：2025 年度 前期分

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

前期

ホスピタリティ入門、現代の社会、観光英語（１）、観光英語特講（１）、基礎ゼミナール、観光文化専門演習（１）、観光文化実践Ⅲ（観光文化・スポーツ）観光文化実践Ⅳ（観光地経営）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

【講義型授業】

- 基礎的な知識の習得

  学生が、観光の社会的役割について基礎的な知識を理解、習得し、その知識を社会活動や就職活動に幅広く活用・応用できることを目指す。

- 幅広い理解

  学生が、社会学、経済学や経営学など様々な学問と領域を複合的に取り入れたて学ぶことにより、現代社会の傾向や各産業の実態を理解することを目指す。

- 思考・洞察力の育成

  実務家教員である講師が示す業務経歴上のケース・スタディを通じて、産業界の現状や課題、それに対する洞察力と解決策を見出す力を養うことを目指す。

【実践型授業】

- 社会人基礎力の育成

  学生の自主性と主体性をもって取り組む力や、学外における協力事業者への対応力を養う。併せて事業者が直面している現状や課題を明らかにし、違う角度からのアプローチや斬新的な発想の根幹を発見する力を身につけることを目指す。

- キャリアビルドのきっかけを養う

  学生が実践的研究活動を通して、自身のキャリア構築のきっかけや新たな希望、意欲を沸き立て、産業界の次世代を担う立場と、それを今後継続、自身が受け入れる側の立場になることを意識できるよう促し実施できる力を身につけることを目指す。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

【講義型・実践型共に】

- オリジナル教材、全員参加型の講義展開

（PowerPoint の映写、MicrosoftTeams への格納および学生による閲覧）

全ての科目において指定する教材や配布資料に加えて、実務家教員としての講師の経験と知見をベースにケース・スタディ、シミュレーションを行う。理論とシステムを前提に実務での差異を学びながらも、既存の形式にとらわれるのではなく、斬新で革新的（おもしろい）と思える取組みを実施。講義目的を明確にするためのクイズ形式での出題、世間のトレンドを取り込みながら講義テーマへの紐付けと、全員参加型のディスカッション形式の講義を展開している。

- リアクションシート作成、レポート作成

（MicrosoftTeams への課題提示および学生による提出）

「現代の社会」「観光英語」では、学生は毎回の授業終了時にリアクションシートの提出を行っている。そのシートを元に解説や質問へ回答することで、学生が望むトピックス等を選択し講義内容へ盛り込めるように展開。また学生の理解度と人柄を把握するためのコミュニケーションツールとしても活用している。

- 課題解決のための分析、仮説立てと検証

「当たり前の全否定」という既成事実を全てを否定した形で、これを覆す斬新なアイデアと発想、創造力を駆使した仮説を立て、その仮説が実現可能かどうかを分析、検証を行った。どのようなプロセスで実現可能か、また何が弊害となって実現が不可能かをしっかり検証させた。教員は各履修生の能力や姿勢、個性に応じフォローアップを実施

４　成果（どうだったか：結果と評価）前期の授業のみ

【講義型授業/実践型授業】

- 授業評価アンケート

おおむね良好。

- 学生のリアクションシート、レポート

学生は、学修した内容を自身の言葉で説明できるようになり理解を深めることができた。また授業内での質問を教員に聞くことで、学生の授業への理解度や今後の活用への意欲を個人別に把握することができた。

５　今後の目標（これからどうするか）

【講義型授業】

実務家教員としての知見と経験を大いに活用し、革新的かつ学習意欲向上を目指すトピックスを抽出し、シミュレーションやケース・スタディを積極的に行う。学生が、自身と社会での存在価値を見出し、次世代の観光業界を担う人財への成長と糧となるよう指導していく。

【実践型授業】

実践型授業への協力事業体の拡充と実施内容の更なる精査を行う。学生の各履修生の学年ごとの意識や経験によって課題取組への大きな差異があることが判明。これらの課題に対し、学生個々のアビリティとポテンシャルを上げられるようなアプローチ法を再度検討し、協力事業体との連携を強化していく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

【講義型授業/実践型授業】

- 各授業の配布レジュメ（非公開：MicrosoftTeams へ格納）
- 学生が作成したリアクションペーパー（非公開：MicrosoftTeams へ格納）
- 学生が作成したレポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化学科　氏名：植松 大介

記 入 日：2026 年 1 月 31 日

更新対象：2025 年度 後学期期分

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

後学期

観光英語（2）、観光英語特講（2）、観光文化専門演習（2）、観光文化入門演習、観光文化実践Ⅶ （地域連携）観光文化実Ⅺ（産学連携）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

【講義型授業】

- 基礎的な知識の習得

  学生が、観光の社会的役割について基礎的な知識を理解、習得し、その知識を社会活動や就職活動に幅広く活用・応用できることを目指す。

- 幅広い理解

  学生が、社会学、経済学や経営学など様々な学問と領域を複合的に取り入れたて学ぶことにより、現代社会の傾向や各産業の実態を理解することを目指す。

- 思考・洞察力の育成

  実務家教員である講師が示す業務経歴上のケース・スタディを通じて、産業界の現状や課題、それに対する洞察力と解決策を見出す力を養うことを目指す。

【実践型授業】

- 社会人基礎力の育成

  学生の自主性と主体性をもって取り組む力や、学外における協力事業者への対応力を養う。併せて事業者が直面している現状や課題を明らかにし、違う角度からのアプローチや斬新的な発想の根幹を発見する力を身につけることを目指す。

- キャリアビルドのきっかけを養う

  学生が実践的研究活動を通して、自身のキャリア構築のきっかけや新たな希望、意欲を沸き立て、産業界の次世代を担う立場と、それを今後継続、自身が受け入れる側の立場になることを意識できるよう促し実施できる力を身につけることを目指す。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

【講義型・実践型共に】

- オリジナル教材、全員参加型の講義展開

（PowerPoint の映写、MicrosoftTeams への格納および学生による閲覧）

全ての科目において指定する教材や配布資料に加えて、実務家教員としての講師の経験と知見をベースにケース・スタディ、シミュレーションを行う。理論とシステムを前提に実務での差異を学びながらも、既存の形式にとらわれるのではなく、斬新で革新的（おもしろい）と思える取組みを実施。講義目的を明確にするためのクイズ形式での出題、世間のトレンドを取り込みながら講義テーマへの紐付けと、全員参加型のディスカッション形式の講義を展開している。

- 課題解決のための分析、仮説立てと検証

「当たり前の全否定」という既成事実を全てを否定した形で、これを覆す斬新なアイデアと発想、創造力を駆使した仮説を立て、その仮説が実現可能かどうかを分析、検証を行った。どのようなプロセスで実現可能か、また何が弊害となって実現が不可能かをしっかり検証させた。教員は各履修生の能力や姿勢、個性に応じフォローアップを実施。

- ゲスト講師による現場の現状と課題提起

現時点で現場を取り仕切っている担当者をゲスト講師として招聘し、現場の現状を講演して頂いた。同時に現在現場が抱えている課題を説明して頂き、この課題に対して産学連携を元に解決策を考案、提言できる観光を構築し実施した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）前期の授業のみ

【講義型授業/実践型授業】

学生作成のプレゼンテーションシートおよびリアクションシート、レポート

学生は、学修した内容を自身の言葉で説明できるようになり理解を深めることができた。また授業内での質問を教員に聞くことで、学生の授業への理解度や今後の活用への意欲を個人別に把握することができた。

５　今後の目標（これからどうするか）

【講義型授業】

実務家教員としての知見と経験を大いに活用し、革新的かつ学習意欲向上を目指すトピ

ックスを抽出し、シミュレーションやケース・スタディを積極的に行う。学生が、自身と社会での存在価値を見出し、次世代の観光業界を担う人財への成長と糧となるよう指導していく。

【実践型授業】

実践型授業への協力事業体の拡充と実施内容の更なる精査を行う。学生の各履修生の学年ごとの意識や経験によって課題取組への大きな差異があることが判明。これらの課題に対し、学生個々のアビリティとポテンシャルを上げられるようなアプローチ法を再度検討し、協力事業体との連携を強化していく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

【講義型授業/実践型授業】

- 各授業の配布レジュメ（非公開：MicrosoftTeams へ格納）
- 学生が作成したリアクションペーパー（非公開：MicrosoftTeams へ格納）
- 学生が作成したレポート（非公開）
- 学生が作成したプレゼンテーションシート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化学科　氏名：山田祐子

記 入 日：2025 年 8 月 28 日

更新対象：2025 年度 前期分

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

前期

「観光事業論」（前期・専門教育科目・必修）、「観光文化総論(1)」（前期・専門教育科目・必修）、「観光文化専門演習(1)」（前期・専門教育科目・必修）、「卒業研究演習」（通年・専門教育科目・必修）、「卒業研究」（通年・専門教育科目・必修）、「旅行事業論」（前期・専門教育科目・選択必修）、「ホテル・マネジメント論」（前期・専門教育科目・選択必修）、「観光文化実践Ⅷ・インターンシップ」（前期・専門教育科目・選択必修）

後期

「観光学」（後期・共通教育科目・選択必修）、「温泉地理学」（後期・共通教育科目・選択必修）、「観光文化総論」(2)（後期・専門教育科目・必修）、「観光文化入門演習」（後期・専門教育科目・必修）、「観光文化専門演習(2)」（後期・専門教育科目・必修）、「卒業研究演習」（通年・専門教育科目・必修）、「卒業研究」（通年・専門教育科目・必修）、「ブライダル事業論」（後期・専門教育科目・選択必修）、「観光文化(江戸・東京) 」（後期・専門教育科目・選択必修）、「観光文化実践Ⅹ・インターンシップ」（後期・専門教育科目・選択必修）、「観光文化実践Ⅸ・PBL」（後期・専門教育科目・選択必修）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

～講義型授業～

①　基礎的な知識を習得する

学生が、観光の歴史や文化、制度、社会的役割について基礎的な知識を習得し、習得した知識を社会活動や就職活動に活用することを目指す。

②　幅広く理解する

学生が、人文学や社会学、経済学や経営学など多様な学問を複合的に取り入れた観光学を学ぶことにより、幅広く現代社会や観光産業を理解することを目指す。

③　思考力を磨く

学生が、実務家教員である講師が提示するイノベーティブなケース・スタディを通じて、観光産業の現状や課題を見出す力を養うことを目指す。

～実践型授業～

① 社会人基礎力を身につける＜主体性、課題発見力＞

「観光文化実践」では、学生が自ら計画を立て検証するという一連の研究活動によって“主体性”をもって物事に進んで取り組む力や、校外における研究活動を通じて社会や事業者が直面している現状を分析し課題を明らかにする“課題発見力”“アイディア発想力”を身につけることを目指す。

② 職業観を身につける＜観光産業、サービス産業＞

学生が、消費者の目線を大切にしながらも、研究活動を通じて産業側の経営者や事業者の立場になることで幅広い“思考力”を身につけることを目指す。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

～講義型授業～

① オリジナル教材、書籍や最新記事の提示

（PowerPoint の映写、MicrosoftTeams への格納および学生による閲覧）

全ての科目において指定する教材や配布資料に加えて、実務家教員である講師の経験と知見に基づいたケース・スタディを提示することで、理論や制度をふまえながらも革新的な事業や取組みを展開するまでの過程を具体的に解説している。書籍は図書館に所蔵されている関連書籍を紹介し、図書館の積極的な活用を促している。また、日経新聞社の最新記事を題材にし観光産業の最新事情についてディスカッションを行っている。

② リアクションシート作成、レポート作成

（MicrosoftTeams への課題提示および学生による提出）

「観光文化総論(1)」「観光事業論」では、学生は毎回の授業の後に学生がリアクションシートを提出し、講師はリアクションを解説したり質問へ回答することで、講師が学生個人の理解度を把握し双方向のコミュニケーションを図っている。

③ アクティブラーニング

「ホテル・マネジメント論」では、教科書を使用しながら理論や事例を学び、期末のレポートでは学生自らが選択したホテルへ赴き観察調査を行い、授業内でプレゼンテーションを行った。

④ ゲスト講師

「ホテル・マネジメント論」では、宿泊産業に従事する方（卒業生：㈱三井不動産ホテルマネジメント）を招聘し講義を行ってもらうことで、学生は机上の空論ではなく、現在の社会情勢や背景に即した学修が可能となり、正しく職業観を養うことができる

ようになる。

～実践型授業（観光文化実践Ⅷ・インターンシップ）～

① キャリア探求

「観光文化実践Ⅷ・インターンシップ」では、学生はキャリア形成およびインターンシップの意義を学んだ後、講師は各履修生の能力や姿勢に応じて夏期インターンシップの実習先をマッチングしサポートを行った。（履修生６名、実習先６カ所）

② 自己紹介書作成

学生は、実習先の企業へ提出するための自己紹介書を作成することにより、実習中の目標を明確に定め、また、自身の強みや弱みを内観することで職業観を養った。

③ 実習参加と日報作成

学生は、各々が希望する実習に参加した後、日報を作成することで日毎の感想とモチベーションの度合いを記録し、また、発揮した社会人基礎力を自己評価した。これらの日報をもとに後期の「観光文化実践Ｘ・インターンシップ」で振り返りを行う。

４　成果（どうだったか：結果と評価）前期の授業のみ

～講義型授業～

～実践型授業（観光文化実践Ⅷ・インターンシップ）～

① ３－①　授業評価アンケート

おおむね良好であった。

② ３－②　学生が作成した MicrosoftTeams の Forms のリアクションシート、レポート

学生は、学修した専門用語を文章化することで理解を深めることができ、加えて、授業内でできなかった質問を講師へ直接できることになり、講師は、学生の授業内容の理解度や文章作成能力や語彙の活用力を個人別に把握することができた。また、MicrosoftTeams の Forms からゲスト講師への事前質問も収集し授業内で回答することで学生の高い満足度を得ることができた。

５　今後の目標（これからどうするか）

～講義型授業～

講師は、実務家教員としての知見や経験をいかしながら、革新的でイノベーティブなケース・スタディの解説やゲスト講師招聘等を積極的に行うことによって、学生が、社会における観光産業の存在価値や地方創生における役割、観光産業で働く意義を正しく理解で

きるよう指導していく。

～実践型授業（観光文化実践Ⅹ・インターンシップ）～

今年は各履修生に応じた実習先を講師がマッチングしたが、各履修生の学年ごとの意識や能力・経験によって実習できる日数や内容に大きな差があることが分かった。また、個々人の能力・経験にマッチした実習先を講師がマッチングすることにも時間的な制約があることも明らかになった。したがって、来年度は予め 2 種類程度の実習プログラムを講師が事前に計画し、それらのプログラムに学生が参加する形式へ授業計画を改訂していく。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

～講義型授業～

①　各授業の配布レジュメ（非公開：MicrosoftTeams へ格納）

②　学生が作成したリアクションペーパー、レポート（非公開：MicrosoftTeams へ格納）

③　学生が作成したワークシート（非公開）

～実践型授業（観光文化実践Ⅷ・インターンシップ）～

①　学生が作成したインターンシップの日報

②　学生が作成するインターンシップ報告書（後期：観光文化実践Ⅹにて実施）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化学科　氏名：江口智子

（記入日：2025 年 9 月 30 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「観光経営学」（前期、選択必須科目、2 単位、目白）

「リーダーシップ論」（前期、選択必須科目、2 単位、目白）

「観光文化実践Ⅰ」（前期、選択必須科目、2 単位、目白）

「観光英語基礎Ⅰ」（前期、必須科目、1 単位、目白）

「観光の情報デザイン（1)」（前期、選択必須科目、2 単位、目白）

「キャリア・プランニングⅡ（1)」（前期、選択科目、2 単位、目白）

「卒業研究演習」（4 年次通年、必修科目、4 単位、目白）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

大学教育の目的は、①社会に貢献し、自分の夢を叶え得る様々なスキルを習得すること、②持って生まれた個性や能力を磨き、自分らしく生きていくための自主性を鍛えること、であると考えている。生き方が多様化した現代に生きる女性として、卒業後に個性と能力を発揮し、自分らしく生きるために必要な学問的、実践的知識・スキルを身につけ、品格を兼ね備えた自主性ある人材を育成したい。そのために学生には、自主的に学ぶ姿勢を基本として学問的知識を習得し、レポート執筆やプレゼンテーション、ディスカッションの経験を重ね、自信を持って自分の考えを文章や言葉で伝えるスキルを身につけてもらいたい。さらに社会人基礎力を高めるために、コミュニケーション力や論理的思考力を鍛える訓練を積み重ねてもらいたいと考えている。大学での様々な経験を経て、観光やホスピタリティ分野のみならず、広く社会で信頼される人材へと成長してほしいと願っている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

①　講義型の科目

学生が飽きないような環境作りを行っている。できるだけ大きな字で視覚情報を豊富に使用した資料を作成し、講義を進めている。パワーポイント資料に加えて、内容に関連した短い動画視聴を取り入れ、大事な点は板書するなどして学生の集中力を切らさないように心がけた。授業の途中には、質問を投げかけ手を挙げてもらうなどし、学生同士での議論や発表、ミニレポートやリアクションペーパーの記入など、学生が飽きず一方向にならない分かりやすい授業作りに力を入れた。特筆すべき経験として、出席する学生がほとんど一人の

授業があった。そこでは、その学生の理解度や関心に合わせて講義の内容や進め方を柔軟に調整した。具体的には、個別の質問に丁寧に答え、理解が深まるよう補足資料を提示し、対話形式で進めることで学習意欲を維持できるようにした。履修者数や学習環境に応じて最適な教授法を選択し、学生一人ひとりに合わせた指導を心がけている。

②演習型の科目

観光の情報デザイン（1）では個人で動画の企画・撮影・編集といった一連の動画制作プロセスを実践的に学べる指導を行った。近年様々な場面で急速に増加している「動画」というツールは、自己表現のひとつの手段として学生が学ぶ意義は大きいと考えている。完成動画の発表では、学生全員に評価シートを記入させ、教員のみならず学生ひとりひとりからのレビューを発表者が受け取ることができるようにし、今後の成長につなげてもらうようにした。

観光文化実践Ⅰでは、ホテルとレストランを題材に、ホスピタリティを実践的に学ぶことを目的とした。授業の前半では、ホテルやレストランに関する基本的知識を講義形式で詳しく解説したうえで、実際にシティホテルを訪問し、施設見学を通じて現場のサービスや顧客対応を見学した。授業の後半では、グループごとに「ホスピタリティを重視した新しいホテルまたはレストランをプロデュースする」という課題に取り組み、パワーポイントを用いて企画をまとめ、プレゼンテーションを行った。

③キャリアに関する科目

「キャリア・プランニングⅡ（1)」では、就職試験を突破することができるよう、SPI 対策に特化した授業を行った。履修生の理解度に応じたレベルの例題を取り上げ、一緒に解きながら丁寧な解説を心がけることで、解法のプロセスを確実に身につけられるようにした。知識の定着をはかるため、一度解いた問題を忘れないよう次の授業時に再び解いてもらうようにした。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

①　講義型の科目

学生が飽きず一方向にならない分かりやすい授業作りを心がけていたことで、学生の発言や発表の場、コミュニケーションの場が多々あり意欲的に学修できた学生が多かったと感じている。

②　演習型の科目

観光の情報デザイン（2）では、初めて動画制作を行った学生がほとんどで、その経験が自信になったという意見があった。また、日常で目にする機会が多い様々なメディアが、何かしらの意図を持って企画されたものであるという視点を持つことができ、メディアリテラシーを向上させることができたという意見も多々見られた。

観光文化実践Ⅰでは、ホスピタリティを理論と実践の両面から理解する学習経験となった。最終プレゼンテーションに向けて、それぞれのチームは独自の発想を活かし、個性豊かで興味深い企画提案を行うことができた。学生はこの科目を通じて、知識の習得に加え、現場から学ぶ洞察力、企画力、チームで協働的にアイデアを形にする力などを磨くことができたと考えている。また、最終プレゼンテーションを通じて表現力や自信を高めることができた。

③　キャリアの科目

キャリア・プランニングⅡ（1）では、SPI（特に非言語問題）に対して苦手意識を持つ学生がほとんどであったが、例題をこなすうちに「できた」と手を挙げる学生数が次第に増え、少しずつ自信をつけてもらうことができた。しかし、教員の期待とは裏腹に、最終試験では「基本的な算数の計算」が間違っているために答えを求められない学生も多々見られた。そのため今後は、基本的な計算スキルを向上させるための取り組みも同時に行うことが必要であろうと感じている。

５　今後の目標（これからどうするか）

今後も学生が「分かりやすく、飽きずに学べる授業」を継続的に実践していきたいと考えている。学生ひとりひとりをよく見ながら、学生が社会で活躍するために必要な学問的知識、実践的スキル、自分を表現し他者と良い関係を持つためのコミュニケーション能力をはじめとした社会人基礎力を身につけることができる教育に力を入れていきたい。

今後ますます、日本が多様な人種が共存する社会へ移行していくなかでは、学生にとってはこれまで以上に「個性という自分らしさ」、「自分の意見を持ち発信する力」、「他者を理解する力」が不可欠になるだろうと考えている。本学は、自己肯定感が十分でない学生も多く見られるが、日々の授業で小さな成功体験を積み重ねることを通じて、自信と自己肯定感を少しずつ高められるよう支援していきたい。その結果として、学生が自らの個性や意見を大切にしながら、他者とも良い関係を築ける人材に成長していくことを目指していきたいと考えている。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

各授業の PowerPoint 資料（非公開）

リアクションペーパー（非公開）

学生の試験回答用紙（非公開）

学生のレポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：観光文化学科　氏名：江口智子

（記入日：2026 年 2 月 20 日）

１　教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「観光英語基礎Ⅱ」（後期、必須科目、1 単位、目白）

「観光文化入門演習」（後期、必須科目、2 単位、目白）

「観光の情報デザイン（2)」（後期、選択必須科目、2 単位、目白）

「キャリア・プランニングⅠ」（後期、選択科目、2 単位、目白）

「卒業研究演習」（4 年次通年、必修科目、4 単位、目白）

２　理念（なぜやっているか：教育目標）

大学教育の目的は、①社会に貢献し、自分の夢を叶え得るための様々なスキルを習得すること、②持って生まれた個性や能力を磨き、自分らしく生きていくための自主性を鍛えること、であると考えている。生き方が多様化した現代に生きる女性として、卒業後に個性と能力を発揮し、自分らしく生きるために必要な学問的、実践的知識やスキルを身につけ、品格を兼ね備えた自主性ある人材を育成したい。そのために学生には、自主的に学ぶ姿勢を基本として学問的知識を習得し、レポート執筆やプレゼンテーション、ディスカッションの経験を重ね、自信を持って自分の考えを文章や言葉で伝えるスキルを身につけてもらいたい。さらに社会人基礎力を高めるために、グループワークを通じて他人とともに、実践のなかでコミュニケーション力や論理的思考力を鍛える訓練を積み重ねてもらいたいと考えている。

３　方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

①キャリアに関する科目

「キャリア・プランニングⅠ」はオムニバス形式で実施されており、外部講師による講義が中心であるが、担当した 4 回の授業においては、自分の過去を振り返り自己の個性（強み）を見つけ出せるよう、分かりやすい自己分析用シートを数種類用意し、自己分析に取り組んでもらった。さらに、「キャリア＝仕事」という固定的な理解にとどまらない視点の提示を重視した。具体的には、自身の実体験を交えながら、職業選択とライフイベントの関係、価値観の優先順位の変化、キャリアの多様な在り方について紹介し、学生が「自分にとっての幸福とは何か」、「仕事は人生の中でどのような位置づけにあるのか」を主体的に考える時間を確保した。これにより、社会的成功のみを目標とするのではなく、自身の人生設計を長期的視点から捉える姿勢の習得を目指した。

②演習型の科目

主体的に考え自信を持って自分の考えを文章や言葉で伝えるスキルや、グループワークを通して他者と積極的に関わる力を身につけてもらうことを心がけた。

2 年生の観光文化入門演習では、基礎的なアカデミックスキル（テーマを設定し、調べ、考え、他者に伝える）をさらに磨くべく、ひとり 2 回に 1 度、教科書の担当箇所を発表する機会を設けた。発表のレビューを教員だけではなく他の聞き手学生も行った。

観光の情報デザイン（2）では個人で動画の企画・撮影・編集といった一連の動画制作プロセスを実践的に学べる指導を行った。近年様々な場面で急速に増加している「動画」というツールは、自己表現のひとつの手段として学生が学ぶ意義は大きいと考えている。完成動画の発表では、学生自身に自己評価シートを記入させ、自身の作成動画を客観的に振り返る時間を設け、今後の成長につなげてもらうようにした。

観光英語基礎Ⅱでは、1 年生を対象に、観光分野で必要とされる基本的な語彙・表現の習得を土台としながら、実際の観光場面で活用できる英語運用力の育成を目指した。ホテル、空港、観光案内所、飲食店等の具体的な場面を想定した会話練習やロールプレイを行った。学修の定着を図るため、中間・期末テストにより基礎語彙・基本表現の理解度を確認した。

４　成果（どうだったか：結果と評価）

①キャリアの科目

学生が「キャリア＝就職」という理解にとどまらず、人生全体を視野に入れて将来を考えようとする姿勢が養われたと感じている。自己分析ワークでは自らの強みや価値観を言語化する力が高まったうえ、説得力を持って文章表現をする力が身についた。授業後の振り返りからも、「自分にとっての幸福」や「仕事の位置づけ」を改めて考える契機となったことがうかがえ、長期的視点で人生設計を捉える意識の育成につながったと考えている。

②演習型の科目

観光文化入門演習では、主体的に学び、自分で調べ、考え、発表することに慣れることを目指した成果として、大学での学びの基礎的スキルが向上した学生が見受けられた。始めの頃はぎごちない発表だった学生が、発表回数を重ねるうちに分かりやすく発表できるようになり自信を増したことを喜ばしく感じている。

観光の情報デザイン（2）では、学生が観光情報を受け取る側から発信する側へと視点を広げる姿が見られた。動画の企画・撮影・編集を一人で行う過程の中で、「何をどのように伝えるか」を考え続ける経験が、情報の取捨選択力や構成力、表現力の向上につながったと

感じている。また、完成後に自身の作品を振り返る自己評価では、意図や課題を客観的に捉えようとする記述が多く見られた。制作と振り返りの学修を通して、観光情報を主体的に設計する姿勢が育まれたと考えている。

観光英語基礎Ⅱでは、授業を通して基礎的な語彙・表現の定着が見られ、観光場面を想定した基本的な応答ができる学生が増えたと感じている。ロールプレイを重ねることで発話への抵抗感が少なくなり、英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする姿勢が育まれた。中間・期末テストの結果からも、基礎力の向上が確認でき、観光現場で求められる実践的英語力の土台形成につながったと考えている。

５　今後の目標（これからどうするか）

今後も、学生にとって分かりやすく、主体的に取り組むことのできる授業を継続するとともに、一人ひとりに目を向けた丁寧な教育をさらに充実させていきたいと考えている。学生が社会で活躍するために必要な学問的知識や実践的スキルに加え、自分を表現し他者と良好な関係を築くためのコミュニケーション能力など、社会人基礎力の育成に引き続き力を注いでいきたい。

今後、日本社会がより多様化していく中で、「自分らしさを理解する力」「自らの意見を持ち発信する力」「他者を理解し協働する力」は一層重要になるだろう。本学には自己肯定感の低さに課題を抱える学生も少なくないが、授業を通して自己を再発見し、小さな成功体験を積み重ねることで自信を育んでほしいと願っている。

また、近年の学生数減少という状況は、教育の在り方を見直す契機でもあると捉えている。少人数であることを強みとし、対話やフィードバックを重視した双方向型授業を展開することで、学生一人ひとりの成長をよりきめ細やかに支援できる教育環境を構築していきたい。

６　エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

各授業の PowerPoint 資料（非公開）
リアクションペーパー（非公開）
自己 PR 作成シート（非公開）
学生の試験回答用紙（非公開）
学生のレポート（非公開）